

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター

The Newsletter **CNEAS**

第22号

● 目次 ●

巻頭言：歴史にみる日露関係	1
万華鏡：義経再発見の気運	2
Area Report [SIGNAL]：「ロシア」「中国」「韓国」「モンゴル」	3
日本館便り	4
研究機関紹介：英国ケンブリッジ大学におけるアジア研究とスコット極地研究所	5
最近の共同研究会・講演会から	6
最近のセンター出版物より	7
センター動向	7
活動風景	8

巻頭言

歴史にみる日露関係

東北アジア研究センター教授 平川 新



2000年度から本センターの共同研究として「前近代における日露交流資料の研究」を進めてきましたが、これまでに明治以前の日露関係に関するロシア側の史料をかなり集めることができました。これらは3冊の史料集として順次刊行していく予定ですが、ロシアの対日政策の変化を典型的に示すのが、日本人漂流民に対する処遇の仕方でした。

ロシア人がウラル山脈をこえてシベリアに進出し、幾多もの少数民族を支配下において、イルクーツクやオホーツクに町を開いたのは17世紀の半ば、カムチャツカ半島の南端に到達したのは同世紀末のことです。そこを拠点に、さらにベーリング海峡をこえたアメリカ大陸や千島列島へ進出しようとしていたときに、ロシア人と日本人がはじめて出会ったのです。

1696年、カムチャツカ半島に漂着して現地民に保護されていた大坂の伝兵衛は、半島を南下してきたコサック隊に発見されました。モスクワに連行された伝兵衛は、ピョートル皇帝に引見されており、未知の国日本に対する関心の大きさが知られます。伝兵衛は皇帝に帰国を嘆願しましたが許されず、ベテルブルグに新設した日本語学校の教師となることを命じられました。

以後、1710年～45年までにカムチャツカや千島列島のオンネコタン島に3艘の日本の廻船が漂着したことを史料で確認できますが、乗組員のうち12人が日本語教師に任命されています。ロシアはそれまで、オランダや中国経由で日本情報を得ていましたが、漂流日本人から直接に日本情報を得ると共に、日本語を習得しようとしたのです。漂流民はロシアに留めおかれ、帰国の途を閉ざされたのです。

しかしこの流れは1783年、アリューシャン列島に漂着した大黒屋光太夫から変化をみせます。日本との通商を期待していたイルクーツクの商人たちは、光太夫を後押ししてエカテリーナ2世に帰国の嘆願をさせています。その中心になったのが、1792年、光太夫を根室に送還し、最初の遣日使節となったラクスマンでした。1804年に石巻若宮丸の漂流民を長崎に送還した第2回遣日使節レザーノフも、イルクーツクに本拠をおくシェレホフ商会（露米会社の前身）の総支配人でした。このように日露交渉の端緒は、帰国の念を断ちがたい日本からの漂流民と、日本にまで商圏を拡大しようとしていたイルクーツク商人たちの思惑によって切り開かれたのです。

ところが、幕府は通商要求を拒否しました。ラクスマンの来日時には次回の交渉に含みをもたせた対応でしたが、レザーノフに対しては厳しい態度で臨んでいます。幕府の対露政策も大きく揺れていたのです。半年の滞留ののち、空しく長崎港を出たレザーノフは、部下に命じて樺太や国後島などの日本人居留地を襲撃させます。ロシアの力を誘示して強圧的に開国を迫ろうとしたのです。漂流民送還を名目にした平和的な対日交渉は破綻したのです。このあとは力の応酬となりました。1811年に日本側が測量のために南下したゴロヴニンを国後島で捕縛したのに対して、翌年、ロシア側はやはり国後島沖で高田屋嘉兵衛を拉致し、ゴロヴニンとの交換を要求したのです。1813年に人質交換が実現してゴロヴニンも高田屋嘉兵衛も釈放されますが、それから幕末1853年の第3回遣日使節プチャーチンの来日まで、日露関係は途絶えてしまったのです。



義経再発見の気運

東北アジア研究センター教授 入間田 宣夫

学生時代には、義経が好きといえば馬鹿にされるような雰囲気があった。真っ当な歴史学を志しているのに、伝説の主人公に惹かれるようではだらしがない。そのようなことでは、いつまでも、素人の域を出ることができない。好事家のレベルを超えることができない。という声が、どこからともなく聞こえてきた。

確かに、近代の歴史学は、義経に冷たかった。いや、義経だけではない。伝説の主人公、すべてに冷たかった。

近代の歴史学は、確実な史料に基づいて、客観的な歴史の事実、すなわち史実を突き止めることを目指した。そのために、『義経記』ほかの語り物（文学作品）や伝説・伝承など、不確実な史料には、できるだけ触れないように努めた。

そのために、近代の歴史学は、確実な史料として、鎌倉幕府によって編纂された『吾妻鏡』や、公家政権の関係者によって執筆された日記、たとえば九条兼実によって執筆された『玉葉』、などに依拠する度合いを高めることになった。

史実と伝説の区別が意識されず、ややもすれば、主観に流される傾向が強かった近代以前の状態に比較するならば、大変な進歩である。それによって、歴史学に揺るぎない基礎が具えられ、正邪・好悪ほかの感情を抜きにして、客観的な事実を解明する道筋がつけられることになった。

だが、鎌倉幕府や公家政権に関わる史料に依拠する度合いを高めることは、思いがけない弊害をもたらすことにもなった。すなわち、それらの史料をかたちづくれた鎌倉幕府や公家政権の立場に、知らず知らずの間に、同調させられてしまう弊害をもたらすことになった。勝ち残った側の立場にばかり気持ちが向いて、追いやられた側の立場には気持ちが及ばないという結果になった。

それに加えて、近代の歴史学には、当初から、国家の枠組に即して考えるという志向性が目立っていた。それによって、なおさらに、政権の側に寄り添って考える志向性が強められることになった。

近代の歴史学においては、頼朝が人気であった。かれに

よって追いやられた義経は、極端に言えば、死んだ犬のような扱いであった。

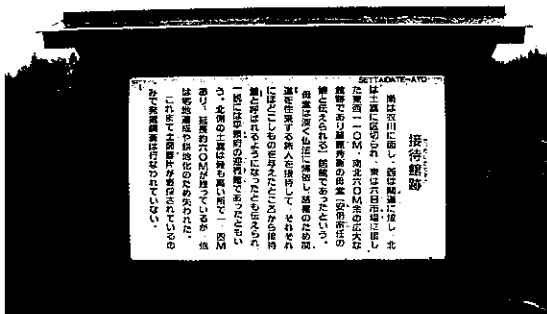
それに対して、最近の歴史学においては、義経が人気である。たとえば、2000年秋、平泉で開催されたシンポジウム「源義経と平泉」においては、「いまなぜ義経なのか」（龍谷大学上横手雅敬）、「義経を支えた人たち」（京都女子大学野口実）、「文治年間の義経」（奈良女子大学前川佳代）、「秀衡の奥州幕府構想」（入間田）、ほかの報告があり、にぎやかな討論が展開されている。義経を主役にするNHK大河ドラマが来年に予定されていることもあって、人気は高まる一方である。

なぜ、このような変化が生じたのであろうか。その理由として考えられるのは、歴史学における史料の扱いが変わったことである。すなわち、これまで切り捨ててきた不確実な史料を、拾い上げて、批判的な見地から分析して、生かすべきところは生かす、という積極的な姿勢に転じたことである。いいかえれば、歴史学の方法の幅を広げるための必死の努力が始められたことである。

それによって、語り物・伝説・伝承をめぐって、国文学や民俗学との対話が進められるようになった。さまざまな義経像を客観的ではないとして、切り捨ててしまうのではなく、それらがかたちづくられる背後にあった人びとのメンタリティーの真実に迫るといった柔軟かつ奥行きのある考察が展開されるようになった。

さらにいえば、近代の歴史学における基本的な志向性、すなわち、国家の枠組に即して考える、政権の側に寄り添って考えるという志向性に対する自己批判が行われるようになった。それによって、国家や政権の関わりばかりではなく、地方の事情や人びとの生活にも、具体的な関心が寄せられるようになった。そのなかで、義経のように、追いやられた人物が果たした役割についても、具体的に追求されるようになった。

あれや、これやで、義経が再発見されつつある。といっても差支えない歴史学の現状である。



これまで、高館が義経終焉の地として語り伝えられてきた。しかし、最近では、衣川北岸に位置する接待館跡が、義経の最後を迎えた「衣河館」の遺跡だとする見方が強くなっている。

AREA REPORT

SIGNAL

ロシアから BRICs とプーチン二期目のロシア

BRICsという言葉を耳にすることが多くなった。アメリカの金融証券会社が将来性のある投資先として人口も国土も巨大な4カ国、すなわちブラジル、ロシア、インド、中国をさして作った言葉である。中国では過熱を憂慮した当局が引き締めを転じているほどだが、1998年の経済危機以来、負けじと経済成長を続けているロシアも含まれていたのにはいささか驚いた。一時期一バレル40ドルを突破した石油の高価格に負うところが大きいとはいえ、最近ではBRICsの一員として投資の対象としても世界的に見直されつつあるように思われる。先のサミットでプーチン大統領の来年始めの来日が決まり、今年の教書演説では例外的に日本を重視する発言を行って注目され、石油パイプラインも日本の望むナホトカルトで決まりそうである。このような中、官民挙げての日露の連携をうたった「日ロIT戦略会議」(5月20-21日)も開催された。ロシア政府とともに主催した日本経済新聞はこの会議を含め「日ロIT協力」と題する特集を組んでいる(6月16日)。そこには高い理数系教育の水準を背景にソフトウェア開発を国策として推進しようとするプーチン政府の戦略、優秀な頭脳の獲得を目指してロシアに進出する欧米のIT、航空宇宙産業などの動向、運輸産業、遠隔医療、第三世代携帯等に関して日露間で行われた会議についても伝えられた。

一方、日露関係については消費ブームを背景に本格的な進出を図ろうとする日本企業の動き、邦銀でいち早くロシア進出を果たし順調に業績を伸ばすみちのく銀行の活動、日露間の交通網の拡大についても特集されていた。チェチェンのカドゥイロフ大統領爆殺事件(5月9日)、その隣国イングーシ、ダゲスタンにおける大規模なテロ(6月21日)、両事件直後のプーチン大統領による電撃的な現地訪問にも表れている通り、ロシアに経済に専念できる政治的安定が訪れる気配はなかなか感じられないが、上述の好調な経済を背景に、市場経済への移行に伴う混乱から抜け出し、将来設計の行えるノーマルな生活を取り戻しつつある国民が増えているのも事実であろう。他方、石油会社ユコス社のホルコフスキー氏の逮捕と同社に対する莫大な追徴課税策を政治的な介入とみなしたのか、今年の上半期にはすでに前年の2倍以上にあたる55億ドルもの資金が国外に逃避したという。また人気のTVコメンテーター・パルフォーノフも独立テレビから解雇(元チェチェン大統領ヤンダルビエフを爆殺した罪によりカタールで逮捕、裁判で終身刑が宣告されたロシア人被告の妻へのインタビューが原因)されるなど統制色の強化に対する懸念は根強い。強力で繁栄した国家を目指して始動した二期目のプーチン政権の今後の舵取りが注目される。(寺山恭輔)

中国から チャイナ・マンガ・ジジョー

今、中国は「動漫」がブームだ。「動漫」とは、「動画」(アニメーション)と「漫画」(コミック)のことをいう。中国の「漫画」は、もともと誇張とユーモアの手法で日常の暮らしや時局を描いた絵を指していたが、近年、「動画」と「漫画」を合わせて「動漫」というようになった。これは日本のコミックとアニメが流行っていることと関係があるようだ。

1980年に「鉄臂阿童木(鉄腕アトム)」が日本のテレビアニメとして最初に中国に輸入され、テレビで放映された。現在、中国では、出版業の繁栄とインターネットの普及にともなって、アニメとコミックの人気の高まっている。もちろん、中国にも連環画という絵本(コミックブック)もあったが、細やかな描写では、日本のものに及ばない。日本アニメとコミックに関心が寄せられるのもむ

べなることであろう。中国検索サイトで調べると、ヒット件数ランキングトップ3(2004.7.12付)は、1位「花より男子(流星花園)」1,640,000件、2位「スラムダンク(灌籃高手)」1,350,000件、3位「ドラゴンボール(七龍珠)」804,000件だ。この人気に危機感を懐き、1995年国内マンガ産業保護策「5155プロジェクト」を取り、外国マンガの出版を原則禁止したが、WTO加盟後も依然として海賊版は後もたたない。ここ一年で、「名探偵コナン(名偵探柯南)」、「犬夜叉」などが中国の出版社から正式出版された。

これほどの「動漫」に、中国にも湯蕩青という人気マンガ家が登場するまでになった。いまや「日本独特の文化」アニメマンガが中国文化を席卷しているといつてよいのかもしれない。もちろん、その勢いは中国に止まるものではない。(磯部 彰)

韓国から 「韓流」の行く末は？

最近、映画・ドラマを中心とした「韓流(韓国ブーム)」について耳にすることが多くなった。これは中華圏から火がついて、東南アジア、日本へと波及してきたもので、日本での「韓流」はむしろ遅い部類に属しているようである。

先日、東北大調査チームの一員として中国吉林省・延辺朝鮮族自治州を回る旅行をしたのだが、延辺は中国・朝鮮の国境地帯と言うこともあって、韓国文化の浸透が著しかった。ある意味で韓国文化の飛び地と言えないかと思ったほど、カラオケやインターネットカフェ(网吧と呼ばれる)の普及が急速に進んでいて、繁華街のネオンのけばけばしさは韓国の繁華街を想わせるものだった。それらを見て、「韓流」とは単に映画・ドラマという次元に止まるものではなく、文化的コンテンツの複合体としての性格を持ったものではないかと感じた。家電製品、携帯電話、ファッションなどを合せて、それらは「文化輸出」としての側面を多分に有しているのである。

その文化的複合体としての「韓流」ということでは興味深いことが多々ある。アメリカ映画に見るように、映画・ドラマは生活スタイル全般を伝播していく上で大きな役割を果たしてきた。し

かしいわゆるメトロポリタンではない地域の映画・ドラマがこのように広範囲で影響力の強いブームを引き起こしたのは稀なケースではないだろうか。特に経済的・文化的に必ずしも韓国の影響を受けていなかった地域——日本や東南アジア、ロシアなど——にまでその「韓流」が波及していることはたいへん興味深い。これはある意味で21世紀的な文化伝播の様相を示しているのかもしれない。

欧米圏にまで波及しそうな勢いを見せているこの「韓流」が21世紀の文化的構図を占う上で、予兆的な重要性を持っていることを見逃してはいけないように思われる。その意味で「韓流」の学術的な分析や国際比較が待たれているのである。

(国際文化研究科助教授・佐野正人)



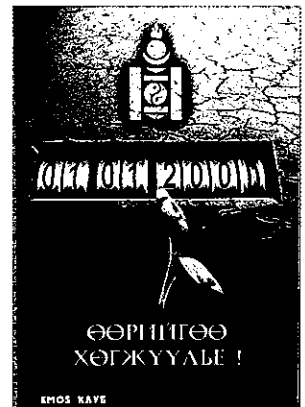
延辺の州都・延吉市の都心にある成宝ビル
(撮影：環境科学研究科大学院生 中野実)

モンゴルから モンゴル人留学生の文集刊行

1990年の民主化以来、多くのモンゴルの若者が日本に留学し、勉学に励んでいる。例えば東北大学在学中のモンゴル国からの留学生数は49人で、中国・韓国に次ぐ多さである。ある者は奨学金を得、ある者は私費で苦学しながらと環境はさまざまである。最近日本に滞在中のモンゴル人留学生達が、電子メールを用いた「自己啓発」セミナーを開催し、その内容が本になって刊行された。「自分をのばそう」と題されたこの小冊子には、若い彼女らが日本での生活の中で考えたこと、反省したことなどを綴った論文22本と、これによせられた意見の数々が収められている。参加者の在籍大学は、一橋大・京大・東京農業大・東京大・北海道大・東北大・神戸大・同志社大・長崎大など、全国の国立・私立大に及ぶ。テーマは「克己心」「本の読み方」「集中力」「外国語学習の意義」「時間配分」「ストレス管理」「コンピュータ活用法」「歴史上の偉人（フランクリン・福沢諭吉・新島襄・新戸部稲造）」など多岐にわたるが、いずれも日常生活の中で直面した身近な問題や、思考の産物を取り上げたものである。民主化後10年経ったにもかかわらず「モンゴル国の

発展を加速するような目立った改革は見られない」（J. ガルバドラフ「セミナー開幕挨拶」）という危機感を共有しながらも、天下国家を論じるような大上段に振りかぶったところがほとんど見られない。そこが若者の文章としては少し物足りないような気もするのであるが、内容の素直さには心打たれるものがある。本の出版費用は、参加した学生達が出し合った。「他人の援助ばかり当てにするようになった最近の風潮を改めるために、実践をもって範を示すべきである」というセミナー趣旨文の言を見れば、やはり若い学生達の意気は軒昂なのである。

（岡 洋樹）



日本館 便り

nihonkan · dayori

6月最終日曜日は“ノボシビルスク市の日”。朝から交通規制が行われ、街の中心部は歩行者天国となります。市全体で盛り上がるこの行事は市民にも好評で、今年が開都111年記念でしたが昨年“ロシアでもっともよい街”としてクレムリンで表彰されたこともあってか、この日の人出は過去最高だったそうです。

昨年は酔っ払いの喧嘩が頻発したためか、当日は市の決定で朝8時から23時までアルコール飲料および瓶入り飲料全般の販売が禁止されました。その他、人の多く集まる広場などには監視カメラが設置され24時間の警戒態勢がとられていたそうです。このため事故や置き引きなどの被害も

例年より少なかったそうです。この先、国際・国内における陸空路の交通拠点として一層の発展を目指すノボシビルスクとしては、この日を祝うために集まった市民や外国その他からの訪問客を守り、この街の安全を保障することは

重要なアピールポイントでもあり今後も力を入れていく課題なのではないでしょうか。

ノボシビルスクの発展はシベリア鉄道の開通によるものであることは周知のことですが、オビ河沿いのこの街は同時に港町でもあります。今年はこのことを改めて強調するかのように水上パレードも行われました。オビ河のクルージングは市民にとって夏の楽しみの1つですが、そのクルージング船を始め、木材などの運送船、森林火災などの際に出動する特殊な船などが紹介され、その仕事ぶりを市民に披露していました。河の水を吸い上げて目的の方向に放水する消火活動用の船の動きを追う子供たちの表情からしてもこの水上パレードは大好評。来年からは恒例として行われることが決定したようです。



アカデムゴロドク内でノボシビルスクの日を祝う人々

日本館が開設されてから毎年ノボシビルスクを訪れるようになりましたがその変貌には目を見張るものがあります。ここ2、3年は特にそのスピードを感じます。この勢いは当分続きそうですが、この街の一員として我々も共に発展していきたいと思えます。

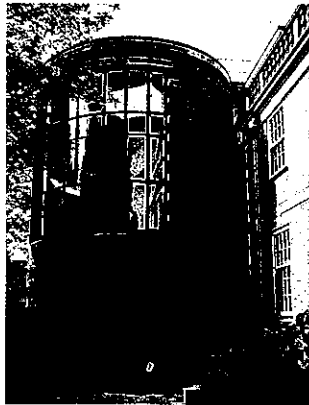
研究機関
紹介

英国ケンブリッジ大学における アジア研究とスコット極地研究所

東北アジア研究センター助教授
高倉 浩樹

ケンブリッジ大学（漢字表記では「劍橋大学」）はオックスフォードと並んでイギリスの最も古い大学であり、ニュートン・ダーウィン・ケインズなど高名な研究者を輩出してきたことはよく知られている。昨年10月から今年の9月にかけて在外研究をこの地でおこなう機会を得たので、その間に見聞した同大学のアジア研究プログラムについてとりわけ私の専門である北アジア及びロシア北方の人類学を中心に紹介したい。

アジア研究の中心は、当然ながら東洋学部である。ここでは東アジアからインドをへて中東、北アフリカが主な対象とされ、文学・言語学・歴史学などの人文学の専門家がいる。またエジプト学やアッシリア学など古代文明についての考古学のメッカでもある。これ以外に、社会人類学・社会学・政治学・経済学などの社会科学の学科・学部においてもアジア研究は行われている。興味深いのは、工学科内に設置された言語コース（Language Unit）である。ここでは仏語・独語・西語に加えて日本語があり、工学者に必要な実務的語学教育及び日本文化の基礎知識が提供されている。



シャクルトン新図書館の外観

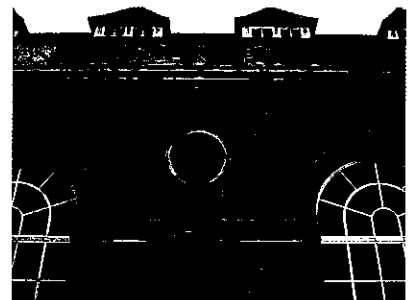
社会人類学科は生物人類学科・考古学科から構成される「考古学人類学学部」の一つである。かつてアフリカ研究で知られた同学科の現在の特徴の一つはポスト社会主義人類学である。実際に専任スタッフ13人の内4名がシベリア・モンゴルを専門にしている。同学科内にはモンゴル・内陸アジア研究コース（MIASU）も設置されている。冷戦時代に旧ソ連でフィールドワークを行った数少ない西側人類学者であり、宗教・儀礼研究者として著名なキャロライン・ハンフリー教授と牧畜研究のデビット・スニス博士を中心にこのコースは運営されている。社会人類学科の教員には、ロシア出身のニコライ・ソーリン＝チャイコフ博士がおり、彼はシベリア・エヴェンキの民族誌調査を行いながら、国家と先住民関係論及び比較植民地主義研究などの理論的研究を行っている。

シベリアの民族誌研究を主なテーマとする私からすれば、この点でケンブリッジ大学の人類学は最高の環境である。とはいえ、私の受入組織は社会人類学科ではない。スコット極地研究所（SPRI）である。極地研究所に何故文系の人類学者が？と思われるのは当然かもしれない。日本の板橋にある国立極地研究所が南極観測で知られるように、極地研究といえばそれは理学が中心だからだ。確かに人類学分野には骨の形態や遺伝子等を扱う生物人類学があり、寒冷地における生理的適応といった研究テーマは存在する。しかし私は専ら文化と社会の専門家である。

1920年に設立されたスコット極地研究所（Scott Polar Research Institute）は、南極探検史における悲劇の主人公ロバート・ファルコン・スコットを記念するものである。北極・南極研究のセンターとして、極地探検家が集う場として、極地の資料を収集することを目的とした研究所は、当初は大学内の地質学博物館内に設けられた。1930年代に独自の建物をもつ研究所となり、さらに1960年代にはフォード財団の援助によって、建物が増設され施設が大幅に拡張された。実験室・冷却室・講堂が整備されたほか、「シャクルトン記念図書館」という名の新図書室も造られ、司書もおかれるようになったからである。スコット研の目玉はこのシャクルトン記念図書館と旧図書室に所蔵された膨大な文献資料及び古写真と地図コレクションである。加えてスコットを始め19世紀の北極探検家達の手記や探検道具、さらに極地探検の研究と歴史を展示する博物館が付設されている。

図書室は極地情報センターとして世界に知られている。1920年代から収集された7百に及ぶ雑誌と14万冊に及ぶ北極・南極及び雪氷に関する文献が収集されている。その方針は関係する書籍は言語を問わず収集することだ。多くは欧米言語及びロシア語であるが、日本語・韓国語・中国語の文献も多数見られる。私の専門に照らしていえば、ロシア北方及びシベリアに関するロシア語文献は極めて多い。図書館のパムフレットには、ロシア北方コレクションは旧ソ連圏内及びアメリカ議会図書館を除くと最も豊富であると書かれている。ここが全開架式であることを考慮すると、使い勝手として世界最高といえるかもしれない。

図書館には書誌学専門員を含む10人のスタッフが働いている。彼らは極地研究に対する文系理系双方の文献を本・論文双方のレベルで収集しているが、その成果はインターネット上で検索可能な「図書・雑誌論文データベース」及び雑誌「Polar and Glaciological Abstracts」(ISSN 0957-5073)へと結晶化する。後者は、極地研究と氷河学に関する



旧正面玄関、スコットの彫像が真ん中に位置している

最新の研究論文の要約を掲載する雑誌である。そこでカバーされている領域は文字通り人文学・社会科学から自然科学すべてである。雑誌の裏表紙には専門分野ごとの目次がついており、一覧すれば、地質学・地理学・土壌学・水文学・動植物学・生態学・経済学・設営工学・言語学・社会人類学・考古学・歴史学・探検史などである。ここをみるとなぜスコット研において人類学者の私が受け入れられるかわかるだろう。極地研究の学術情報

のセンターとして、自然科学だけでなく、人文社会科学の情報も含めた総合性がこの研究所の理念なのである。関係者に聞いてみると、近年始まった文理融合型の研究プロジェクトについては試行錯誤を繰り返しているらしい。しかし、研究基盤の整備という点においては文理の垣根は限りなく低いのである。

研究部門の方は8人の教員と6人の助手、文書専門員など3人がいる。さらに「極地研究コース」という地理学部の大学院プログラムを担っているので大学院生も多数いるほか、研究所研究員 (Institute Associates) として様々な分野の専門家の協力体制を整えており、古写真などの整理のためボランティアも定期的に研究所で働いている。その他、国際雪氷学会の事務局及び南極研究科学委員会もおかれている。

研究分野は理学・工学から人文社会科学と多岐にわたるが、現在は以下の4つのグループに分かれている。第一に、雪氷学と気候変動研究グループ、次に海城氷河環境研究グループ、第三に極地景観とリモートセンシンググループ、最後に極地社会科学と人文学グループである。このうち最後の第三と第四には地理学・人類学・歴史学などの文系の研究者が入っている。私が属しているのは、この第四のグループのなかの一つ「人類学とロシア北方研究グループ」である。ここはピアーズ・ピテプスキー副所長とフロリアン・ステムラー助手を中心に研究活動が営まれている。そこでの主な研究テーマは①トナカイ飼育②自然資源管理③動物・人間・土地の精霊研究④家族と心理療法研究⑤地域及びエスニック・アイデンティティ研究である。ピテプスキー博士は、インド・内陸アジアからシベリアのシャマニズム研究者として知られており、1980年代後半にここに赴任した後は、ソ連崩壊後

フィールドワークが可能となったシベリア民族誌研究を精力的にすすめている。教育面についていえば、同大学社会人類学科との協力の下に多くの若手研究者を育ててきた。助手のステムラー氏はドイツ出身で、西シベリアのネネツ研究を中心とした極北人類学の専門家である。トナカイ飼育及び極北経済、牧畜、民俗知識、先住民運動、中心—周辺関係などがテーマである。

こうしてみると、ケンブリッジ大学には社会人類学科及びスコット研をあわせて6人の人類学者が広い意味での北アジア研究に従事していることになる。これらの地域の大半がポスト社会主義にあることから、大学院生のなかには東欧・ロシア・中央アジアやキューバなどにおける体制変換とその社会的影響について研究しているものも多い。この点でケンブリッジ大学はポスト社会主義人類学及び北アジア研究のメッカなのである。

最後に関連する興味深い組織である「ロシア・東欧研究ケンブリッジ委員会 (CamCREES)」を紹介して本稿を終えたい。この委員会は、学内において様々な組織に分散するロシア及び東欧、より広くいえば中央アジアなどの旧社会主義圏研究者の相互の交流と研究活動を促進するためのものである。研究会の開催と電子メールによる連絡網の構築がその活動の中心であり、委員会の代表は先に紹介したニコライ・ソーリン＝チャイコフ博士である。委員は学内の政治学・経済学・地理学・音楽学・東洋学・社会学・人類学及びスラブ言語学の各学科・学部の教員達によって担われている。この委員会自身による研究会の運営のほか、各組織で行われる研究会のなかで関連する情報を、メーリングリストを通して流しあうことで情報の共有を測っている。研究会の運営の仕方という点で大変参考になると感じた次第である。

● 最近の共同研究会・講演会から ●

講演会「東北アジアの人口動向と労働移動」開催

7月9日(金)、東北アジア研究センター共同研究「東北アジア世界の形成と地域構造」(山田勝芳教授代表)の企画として、中国吉林大学東北亜研究院副院長尹豪教授を講師に迎えて、公開講演会が開催された。尹豪教授は、現在東北アジア研究センター客員教授として滞在中である。吉林大学は中国東北部有数の総合大学として知られ、東北大学とは大学間学術交流協定を締結しているが、本



会場風景

センターはその提案部局のひとつとなっている。

尹豪教授は、中国の人口問題と労働移動問題の専門家であり、中国国内の人口状況と都市農村間移動、また中

国のみならず朝鮮半島、ロシア等々東北アジアの労働移動問題について研究を進め、国際的に活躍されている。世界最大の人口を有する中国を中心とした人口問題は、21世紀の東

北アジアの社会環境全般を大きく規定するものであり、労働移動問題もこれと密接な関係がある。講演では、山田センター長による講師紹介の後、教授より、中国における近年の人口構成の変化や諸国との比較、人口移動の実態などについて、最新のデータを示しながら詳しい説明がなされた。



尹豪教授

(岡 洋樹)

最近のセンター出版物より

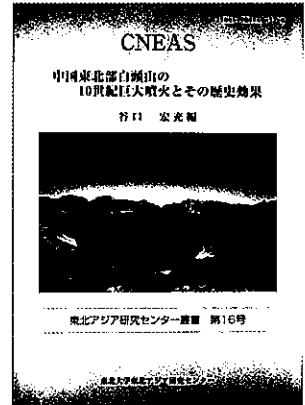
谷口宏充編『中国東北部白頭山の10世紀巨大噴火とその歴史効果』東北アジア研究センター叢書第16号、2004年

本書は当センターの谷口宏充教授を中心として平成12～15年度に行われたセンター共同研究（研究課題名は本書と同じ）の研究成果として刊行された。本共同研究では当センターの特長を生かした文系・理系研究者、及び中国を主体とした海外研究者との連携により、文理合同での現地調査や研究会が実施され、文字通りの文理融合研究がなされた。その結果として本書の構成は、白頭山の巨大噴火に関する自然科学系の研究報告（5編）、主に中国・韓国の文献調査による人文科学系の研究報告（3編）、両者の融合研究による報告（1編）からなっている。巻末の白頭山露頭集では白頭山の姿とともに中朝国境沿いの風景をかいま見ることができ、貴重なスナップともいえる。調査が中国領内のみと制限される現段階において、以上の成果は十分満足のいくものであるが、次へのステップとして北朝鮮領内における調査の必要性をいずれの

報告からも強く感じさせられるところである。

○はじめに／谷口宏充●白頭山苔小牧（B-Tm）テフラの年代学的研究／奥野充・木村勝彦・中村俊夫・石塚友希夫・森脇弘・金奎漢●白頭山10世紀噴火の噴火推移／宮本毅・中川光弘・田中勇三・吉田まき枝●白頭山9世紀噴火の発見とその意義／中川光弘・宮本毅・田中勇三・吉田まき枝●中国東北部長白山周辺地域の土壌／菅野均志●長白山天池火山地域の地球物理学的研究／金旭・江原幸雄・谷口宏充●渤海遺地邑落消長を追う／成澤勝●渤海国の滅亡とその遺民の流れ／鄭永振（田原訳）●高麗・朝鮮から見た渤海・白頭山への関心／鶴園裕●白頭山噴火と火山伝承／宮本毅○白頭山露頭集／宮本毅・長瀬敏郎・菅野均志

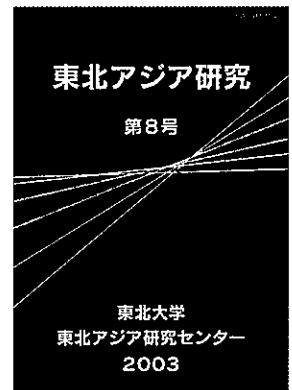
（宮本 毅）



『東北アジア研究』第8号 2004年3月刊行

●近代東北アジア地域の経済統合と日本の国策会社——東亜勧業株式会社の事例から——／江夏由樹●新発見のS.ポヤンネメフ作戯曲「モンゴルを囲む侵略国家間の状況を簡略に示した歴史」について／王満特眞●Dge lugs pa and the Qing Empire: Union of Ideologies／Nikolay V. Tsyrepilov●ノア画像を用いた朝鮮半島における高速幾何補正方法／藤原和彦・工藤純一●磐梯山1888年噴火によるサージ堆積物と被災記録／紺谷和生・谷口宏充●有珠火山1977年噴火におけるプリニアン噴出物／中村一輝・谷口宏充●伊豆大島1986年LA溶岩流の表面形態／菅野繁広・後藤章夫●Petrogenesis of Glasses and Microlites in Mantle Xenoliths from Baikal-

Mongolia Region: a Review／K. Litasov, V. Sharygin, V. Simonov, V. Malkovets, H. Taniguchi●シベリアの外国人労働者としての抑留日本人／山田勝芳●Following the footprints of Chinggis Khan: Research travel to Eastern Mongolia, and the Daurian Steppe during 2003 June 06-12／W. Boerner, D. Amarsaikhan, M. Sato●夏目漱石家族文書について／磯部彰



センター動向

■寄附研究部門

【環境技術移転（NKK）寄附研究部門】

- 渡邊 之（ワタナベ、イタル）教授：環境技術（平成13年1月着任）
- 麴叶（スエー）助手：環境政策（平成13年4月着任）

■現在の客員研究者

本年7月～9月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

〈客員教授〉

【国内から】

- 和田春樹（ワダ、ハルキ）教授：東京大学名誉教授・ロシア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹（エナツ、ヨシキ）教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論

- 田村正行（タムラ、マサユキ）教授：国立環境研究所上席研究官、ノアデータを利用したシベリアの環境解析

【海外から】

- RASSKAZOV, Sergei（ラスカゾフ、セルゲイ）教授：ロシア科学アカデミーシベリア支部・同位体地質年代学研究所・所長、「東アジアにおける、中生代から新生代にかけての太平洋プレートの沈みこみに関するマグマからの検討」
- 尹豪（イン、ゴウ）教授：中国、吉林大学東北亜研究院教授・副院長、「東北アジアにおける人口と労働移動問題の研究」

〈客員研究員〉（新たな着任者のみ）

- 朴慶洙（パク ケンシュ）研究員：韓国、「江戸時代の商品流通に関する研究」

（岡 洋樹）



中国中央民族大学主催

「モンゴル語文献国際学術会議」 参加報告

中国内には、内蒙古自治区を中心に約350万人のモンゴル族が居住しているが、この数字はモンゴル国の人口約250万人をはるかに上回る。これだけの人口のモンゴル族を擁する中国において、モンゴル族の歴史・言語・文化を研究するモンゴル学に関しても質・量ともに世界有数の拠点が少なくない。中国におけるそうしたモンゴル研究の拠点は内蒙古自治区の中心地フフホト（呼和浩特）をはじめ、北京、ウルムチ、赤峰、蘭州などが挙げられる。このうち、北京市のモンゴル研究といえば中国社会科学院と中央民族大学がその筆頭に位置するであろう。



開会式の壇上

本年5月1日から4日まで、北京の中央民族大学の主催により「モンゴル語文献国際学術会議」が開催された。この会議は、中国の首都北京で開催されたモンゴル学関係の最初の国際会議として意義深いものであり、またそのテーマが「モンゴル文献学」ということもモンゴル研究の動向を反映するものとして注目に値するものであった。

ちなみに会議の主催者側代表世話役は2003年に東北アジア研究センターに客員教授として滞在した王満特嘎・中央民族大学教授（モンゴル学部主任）であり、また本センターからは岡洋樹助教授と筆者（栗林均）の2名が参加した。

会議には中国各地のモンゴル学研究者をはじめ、モンゴル（4名）、日本（10名）も含めて合計66名の研究者が参加した。この他、中央民族大学の関係者や北京在住の研究者らも加わって、全体会議の出席者は優に100人を越える規模の学術会議となった。

会議の日程は、1日（土）が登録と歓迎宴、2日（日）の午前中が開会式、同日午後から3日（月）までが分科会に分かれて研究発表と討論、4日（火）が閉会式であった。



開会式、会場

会場は全体会議も分科会も北京市の中央民族大学に隣接する中央社会主義学院の賓館（ホテル）が建てられ、会議参加者の宿泊も食事も、同ホテル内の施設が使われたため、参加者には極めて利便な環境であった。

研究発表と討論は、「歴史文献」「文学・古書籍」「言語文献」という3つの分科会に分かれ、2日（日）の午後と3日（日）の午前・午後を目一杯使って、それぞれ20名から25名の研究発表と討論が行われた。筆者が出席した「言語文献」分科会では、20件の研究発表が行われたが、発表も討論もすべてモンゴル語であった。



言語文献部会における研究発表と討論

会議の開催中は、連日歓迎宴が開催され、分科会を越えて研究者間の和やかな交流が行われるとともに、今回の会議の成功を祝し、また第2回・第3回の開催へと発展するよう乾杯が繰り返された。

編集 後記

法人化後の新体制が発足した本年度からは、ニューズレター編集は広報情報委員会で担当いたします。本号では、大学院国際文化研究科の佐野先生よりシグナルに記事をいただきました。ありがとうございました。（工藤純一）